町民文芸

只見短歌会 七月詠草

大塚栄一

指導

高価なる補聴器買へども煩はしときをり使ふにいたく手間取る 古川 新国由紀子 英子

炎天下自動散水の装置などに子は黙々ととり組みてをり

智

立籠める朝霧の中つき抜けて澄む鳥の声しばし聞き入る 夏草を取りつつ空を見上ぐれば秋あかね早も出でて驚く 小倉キミ子

実験ニュ ースに怒りたる被爆者の言葉に胸を打たれる 関谷登美子

水爆の 渡部ゆき子

れずに戸を開けをりて裏庭のひとつの蛍に見蕩れて居たり 目黒 富子

眠

渡部ヨリ子

新国

洋子

時折は ハウスの中に風入りてトマト捥ぎゆく顔の涼しき

含ませば身震ひをする孫達に梅の実の良さ説く顔歪む

声に出し唄へ ぬわれは懐かしき昭和演歌の歌詞めくりゐつ

> 只見俳句会 八月例

会

目黒十

指導

子

信

やかましい蝉が邪魔する昼寝時 音の寝たる姿や雲の峰

観

見えていてすぐに消えゆく梅雨の 光るとき風の音聞く蛍かな 順

山

汗ばみて右左へと鍬を引く いつまでも慣れぬ正座や夏座敷

都

夕立や同級会の相合傘 太過ぎしキュウリどっかと流し端

修

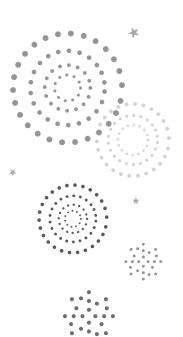
朝顔の庭隅に咲くこぼれ種 夏帯に母想い黙す帯戸の間

籠編む草軒に吊して土用 初トマト神仏に上げ朝餉かな 入り

穂

礼

別莊と言ふ夏草叢の中にかな 一と品は散歩の折りの夏蕨



(出詠順